
中越地震被災住民が行った避難所等における健康を守る共助の活動

(武田道子ほか、日本災害看護学会誌 14: 2-14, 1993)

2013年7月5日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

1 はじめに

災害数が増加している今、国は公助のみでは被災者にニーズの充足ができないと認識したため、国民一人一人や企業等が自ら取り組む自助、地域の人々や企業、団体が力を合わせて助け合う共助の取り組み、さらにはこれらの連携が必要であるとの考えのもと、災害被害を軽減するための国民運動を推進している。例として2004年の新潟中越地震で小千谷市では最高136カ所の避難所に人口7割の避難所を受け入れ、そのうち市が管理運営したのは全体の1割弱であった。それ以外の避難所は、地区教議会や町内会、住民が管理しており、このことから被災者のニーズの充足のために共助の存在が大きい事が伺われる。だが現在の課題の一つとして、保健師による平穏時の防災活動が重要であるにも関わらず、保健師が平穏時に住民の健康を守る共助を育成するための活動報告は見当たらない。そこで本研究では中越地震被災当時、共助が特に必要と考えられている避難所等で生活している時期に、地域住民がどのような健康を守る共助を実施したか、また振り返ってどのような健康を守る共助を実施したら良かったと考えるかを聞き取り、健康を守る共助内容を明らかにすることにより、保健師による平穏時の共助の育成を目指した防災活動に対する示唆を得ることを目的とした。また、本研究でいう「健康を守る共助」とは、被災した地域住民が生活レベルの低下や保健医療福祉サービスの欠乏した状況において、健康生活を維持し、健康の二次被害防止のために住民同士が支え合うという意識を持ち、知識技術を活用して助け合うことと定義する。

2 方法

対象:2004年に発生した中越地震で被災したA市住民を対象とした。対象者の要件は避難所生活の経験を持ち、被災時に地域住民リーダーの役職を持っていたこととした。被災時に共助を主体的に行ったと同時に、自身も共助によって支援された経験を持つと考えられるからである。

調査期間:2010年9月

データ収集方法:グループインタビュー法によって調査をおこなった。質問項目は以下の通りである。

- 1 健康面で困ったこと
- 2 周りの人々の健康について支援したことや、支援を受けたこと
- 3 振り返ってみて周りの人々の健康について支援したら良かったと思うことや、支援して欲しかったこと

データ分析方法:「避難所等で住民が周りの人々の健康を守るため実施する共助とは何か」の疑問を常に意識しながら、意味内容のまとまりにコード化し、コード化した言語のデータにラベルを付け、類似したラベルを帰納的にまとめてサブカテゴリーを抽出し、さらにカテゴリーを抽出した。

3 結果

インタビュー参加者は10人だった。分析の結果、抽出されたカテゴリーを以下に示す。

【実施した健康を守る共助】

発病予防のための健康の相互管理
寄り添い、声かけによる心の支え合い
高齢者・病人・こどもへの生活者感覚の世話
仮設住宅での孤独死防止のための早期発見と声かけ
専門機関への情報収集や連携の依頼
近隣関係を保ちつつ生活の助け合い
避難所の活動内容に応じたリーダーの役割発揮

【実施したら良かったと考える健康を守る共助】

避難所における受身生活改善の工夫
不確かな情報に振り回されない工夫
日常に近い生活物資の確保や設備の工夫
高齢者・病人への世話を熟知した配慮
互いに見守りやすい近所付き合い
リーダーが役割発揮できる体制づくり

4 考察

研究結果から、住民が被災前に被災時を想定して、健康を守る共助の必要性認識を持ち、知識技術を身につけるよう備えておく必要があることがわかった。また、保健師は住民共助に働きかけ地域防災力を高める役割を果たし、保健師が行う防災教育活動の中に災害時健康を守る共助を育成することをめざした防災教育プログラムを盛り込む必要があることが示唆された。

5 結論

中越地震被災地の地域住民リーダーを対象にグループインタビューを行った結果、避難所などで健康を守る共助は、心身の病気予防のための共助、災害時要援護者の支えのための共助、近隣関係づくりという意味合いを持っていた。健康を守る共助の内容は、保健師が平穏時に備えとして行う地域住民への教育内容に活用できると考える。

6 学生の感想

今回の課題論文ではいかに災害時に職種に関わらず人々の連携が必要かを痛感した。また災害時の健康を守る共助の内容は、備えとして行われる平穏時の共助に大きく関係すると認識し、日常の生活でもこれを意識し行動することが重要だと感じた。地震などの自然災害の多い日本に住んでいる者として、医療関係者としても、1人の住民としても、この考え方を理解し、災害時と平穏時で重要なことを学んでおくべきだと考えた。よってこの論文の読解はより災害に関する行動を改めて考察する良い機会となった。